第 30 回　番組審議会議事録概要

１．開催日時

令和 7 年 12 月 4 日（木）　午後 1 時 30 分より

２．開催場所

東京都港区台場 2-4-8　フジテレビ本社　会議室

３．出席者

委員長　：吉岡忍

委員　　：渡邊健一、池田哲雄、宮崎美紀子、笹田佳宏、長谷川晶一

（砂川浩慶委員は欠席のため、書面にてご意見をいただいた）

株式会社サテライト・サービス

渋谷謙太郎、永竹里早、窪田正利、落合祐輔、武井俊人

ワーナーブラザーズ・ディスカバリー

高山真詩、矢野栄徳、森井健策、オオタニ ジュリオ弥

JCOM 株式会社

斎藤弘之

株式会社スペースシャワーネットワーク

藤島克之、佐藤麗香、西村和晃

４．議題

１）　「肉球編集部 ～極上どうぶつ家族おもてなしガイド～」

アニマルプラネットにて令和 7 年 12 月 19 日放送

２）　「ポルノグラフィティ岡野昭仁の『DISPATCHERS』

～スタッフが来ちゃいました in スペイン～」

スペースシャワーTV にて令和 7 年 7 月 24 日放送

３）　その他　報告事項

議題番組について各委員から次のような意見が出された。

1）　■「肉球編集部 ～極上どうぶつ家族おもてなしガイド～」について

・ アニマルプラネットの番組なので、自然と人間の共生といった壮大な物語かと思ったがそうではなかった。これは最近増えているペットとともに宿泊できるホテルの紹介や、動物と人間の愛情物語として見ていたが、全体的に一つ一つが食い足りない。飼い主の御夫婦の人間関係や、犬を飼うことになった経緯、犬が脱毛症という点などについて、もっと深く掘り下げた方がよかったのでは。犬にいろんな料理を食べさせているが、犬が本当にそれを求めているのか、とも思った。
・ サブタイトルが「おもてなしガイド」なので、「ペットと一緒に旅行する」ならこういうプランもある、という情報番組かと思ったが、肝心なお値段とか連絡先などの説明がない。肉球編集部というタイトルや、声優さんを起用しているという点で「可愛い路線」と思いきやそうでもない。どういう視聴者をターゲットにしているのかわからない。
・ 新番組の初回放送で番組途中に犬が脱毛症であることを明らかにすることが「この番組は単なるガイド番組とは違うのだ」という意味合いかと思い、この犬にとても感情移入をしたのだが、その感情の矛先がどこにも向かわないまま終わってしまったという印象。
・ 犬をとても可愛がっている人たちから見ると、犬の一人称というのはとても刺さると思う。食事中に犬の一人称のコメントを入れる演出を面白く見ることのできる人たちが、この番組のターゲットなのだろう。
・ まさにセレブな家庭で飼われている犬の紹介番組であり、知らない世界を知る良い機会となった。他方ペットの世界も富めるものと貧しいものの二極化を実感するとともに、この犬自体は幸せなのかと考えた。現実にこのような世界があるのは理解するが、人間と同じような手間をかけた食事などには違和感を覚えた。
・ 一泊二日の旅を 30 分にまとめようというのはなかなか難しいとは思うが、とはいえ全体的にストーリーラインも映像も単調ではないか。テレビなのでどうしても動いている映像で構成していくのだが、場合によってはこういう番組の場合は静止画を活用する方法もあるのではないか。この犬は実は脱毛症……というところは確かにハッとするのだが、だからといってそこに何かがあるわけでもなくて、それがまた流れていってしまう。別にハプニングを仕込めとは言いませんけれども、もうちょっと強弱をきちんとつけて、「おや」と思って見るということが、こういう番組の場合は必要ではないか。
・ （動物写真家の）岩合光昭さんがずっと猫を撮っているが、あの人は本当に猫好きで、猫の習性が分かっていて、猫の習性と後ろの背景をどう組み合わせればいいのか、どういう映像にできるかをずっと考えていると思う。今回の番組は犬を待ち受ける映像がなく、ドックランなども遠くから撮っているので、犬と気持ちを共有してないという気がする。犬の習性をもっと理解すれば、映像の工夫もできたのでないかと思う。

- 海外の番組を放送するだけでなく、日本のアニマルプラネット初のオリジナル番組を制作しようという、その志の高さはすごく素晴らしい。ただ、たくさんのアイディアを盛り込むことで、新番組によくある「壁」にもぶち当たっているところがある。ただ動物を撮るだけではなく、「編集長が本を作る、そのためにワンちゃんを記者にする」というのはいいが、記者としての一人称のしゃべりがほとんどないので、その設定を忘れてしまう。また「おもてなしツアー」がもともとあるものなのか、それとも番組のために作ったものなのか一言も説明がない。もともとあるツアーだとしたら、金額などの情報が入ってしかるべき。つまり、どういう立ち位置でこの番組にお客さんを付き合わせようとしているのかがはっきりしていないまま、番組が進んでしまっている。
  また脱毛症のエピソードを入れたことによって、「もし自分が飼い主だったら・・・」と視聴者は思いながら番組を見ることになり、いわばこの番組がドキュメントになるわけだが、飼い主がどう心配したのかのインタビューがない。記者である犬の一人称で進めるならば、「私はどう思ったか」を犬が自分で発言すればいいが、それもない。
  そして最後のエンディングで「肉球ガイド掲載決定！次はどんなスポットなのか楽しみだ」と編集長が他者になる点に矛盾を感じる。「次はこれを超えるもっとすごいのを認定するぞ」が編集長の仕事なはずで、その設定が完遂されていないのがものすごく惜しい。
  ただ動物を出せばいいという考えではないことはすごく良いと思うので、ぜひその演出を完遂していただきたい。そうすることによって番組は育っていき、見る人が徐々に応援していき、それがコアファンになっていくのではないかと思う。
- まだまだ番組が始まったばかりですので、試行錯誤することで次の作品がまた変わっていくこともあると思う。思い切ってやってください。ぜひ思い切って。

委員からの意見に対し制作サイドから（アニマルプラネット　矢野栄徳氏）

- 今回の番組は海外でも受け入れられる企画を目指した。アニマルプラネットは大自然をテーマにした番組が多いが、動物の可愛らしさは世界中の誰でもが普遍的に見たい、しかも何回も見たくなるのではないか、また海外でも日本のアニメは人気があるので、日本の人気アニメ声優の方を起用することで楽しく見てもらえるのではないかと考えたが、委員の方々に指摘された通り迷走している部分もある。
- 犬がこのツアーをどう受け取っているのという視点は確かになかった。動物が記者としての目線でいろんなツアーを紹介するということを大事にしたので、飼い主さんのコメントや、動物とのコミュニケーションといった場面が少なかったが、様々な要素を入れたほうがより深みが出て、より見る人も共感しやすいのかなと思った。
- 犬が脱毛症への触れ方は中途半端だった。今回はたまたまこのご夫婦になったのだが、脱毛症の部分だけはドキュメントにして病気についてきちんと説明して、また犬が記者に戻って進行していけば、企画意図との両立も可能だったと思う。

2）　■「ポルノグラフィティ岡野昭仁の『DISPATCHERS』
～スタッフが来ちゃいました in スペイン～」について

・ 岡野昭仁さんがスペインを愛し、バルセロナ、カミーノ、サバデルの 3 コーナーを楽しんでいる様子が画面から伝わってきた、良い番組であった。スタッフと現地案内人との仲もまさに和気藹々で、それが画面からも伝わってきた。ラストの一人語りインタビューでは、音楽活動との関わりが述べられており、スペースシャワーらしい構成であった。全景やおいしそうな食のシーンも盛り込まれており、音楽ファン、ポルノグラフィティファンならずとも楽しめる番組となった。
・ 60 分間本当に夢中であっという間に終わったなと思いながら拝見しました。自分も海外取材では、現地の人と食事をしたり飲んだり歌ったり踊ったりみたいなことをしたが、そうした旅番組ならではの楽しさがこの番組には全編を通じて溢れていた。それもひとえにこの岡野さんの人柄によるもので、スタッフとの距離感や空気感もよく、心地よく番組を見ることができました。とにかくみんなビールばっかり飲んでいるなという印象だが、それがことごとく僕はいいシーンだと思った。僕からしたら名前も知らない岡野さんのマネージャーの方であるとか、カメラマンさんの仕事終わりの一杯の表情ですら、自分も一緒にそこでビールを飲んでいるような楽しさを覚えました。
・ 褒め言葉で「全体的にすっとぼけた番組」だと思って楽しく見ました。事前の資料では岡野さんが真面目な顔してサグラダ・ファミリアの前で佇んでいるので、これは成功したアーティストが自分の中を探りながら「ガウディと俺」とか「俺の中のクリエイティブの衝動とは」を語る番組かと思ったが、自分のアーティストの立ち位置について真面目に語っているのは最後のところだけで、あとは全編スペインの空気の中で、旧知の知り合いのスタッフをもてなす愉快なおじさん風で、難しいことを何も言わない。音楽専門チャンネルでアーティスティックなことを何も言わないのが却って面白い。
・ 前半のサグラダ・ファミリアの映像は全然綺麗じゃないし、最後のインタビューも周りがうるさすぎるし、巡礼 2 日目の朝は鳥がうるさすぎてしゃべりが聞こえない。どれも普通だったら撮り直しをすると思うが、すべてそのままで見せているのが、いい意味で「雑」、いい意味ですっとぼけていて、本当にいい意味で裏切られました。
・ スペースシャワーTV のアーティストとスタッフの距離の近さ、信頼関係を感じた。今回も岡野さんとスタッフが互い気取らない、同志的な感じで結ばれている、その空気感がとてもスペースシャワーTV らしくていいと思った。
・ 最初にスペインの名所としてモンセラットというギザギザの山を小さい写真で紹介されて「こんな山があるのか」と思って見ていたが、最後に実際にモンセラットに行き、そこに岡野さんがいて、ガイドの方の解説もあって、冒頭の回収もきちんとできているという点は、旅のカタルシスみたいなものも感じることができた。
・ 手書きの日記テロップがいい。ナレーションが入らなくても、最後まで見ていける。

- 異国の風に吹かれながら、異国のお酒を飲んで、岡野さんが 20 代の頃の衝動や怒りだったものが、50 代になってお客さんの喜びが自分の喜びに変わりつつあるという、自分の音楽観を振り返る設定がとてもいい。あの場面だけでももっと見たかったなと思った。
- 私は他局でポルノグラフィティのドキュメンタリーを撮ったことがあるが、そちらはアーティストとしてのクリエイティブの面から人物の方に深掘っていて、この番組は全く逆で人物の方から入っていき、その人物とスペースシャワーTV の仲がいいので、遊んでいるだけで終わらずに、そこからクリエイティブな面へちゃんと深掘っている。
- 100 キロ踏破の最後に岡野さんが 25 年間の自分を振り返ったコメントをしていて、ファンにとってはたまらない場面だと思うが、ピンマイクをつけていないので、周りの雑音で 1 回では全く聞き取れなかったのが残念。
- 地上波的な見方だと、何か食い足りない。「ライトアップされたサグラダ・ファミリアがすごく綺麗だ」と言うならちゃんと見せてほしいし、「縦列駐車が得意になった」なら実際にやってみせてほしくなる。正直そういう好奇心が湧いてくるのにちょっと満たされなかったという気持ちがある。スタッフとの関連性、人間関係ももっと明らかにしてもらった方が見応えがあったのではないか。最後に岡野さんが自分の青春時代の心模様のようなものを披瀝している部分も自分としてはもうちょっと長く見たかった。
- これはあまり批評するような番組ではなく、率直に楽しんだ方がいい番組。いろいろ突き詰めればガウディの思想とか、サグラダ・ファミリアは今どうなっているのか知りたいとか、100 キロはそもそもどうやって始まったのかとか感じてしまうが、あまりそういうとこに行ってしまうとこの番組全体の構成も中身も変わってしまうと同時に感じる。こうすべき、ああすべきという番組ではないと思った。見ていて楽しい番組だった。

委員からの意見に対し制作サイドから（スペースシャワーネットワーク　佐藤麗香氏）

- 2019 年にしばらくポルノグラフィティとしての活動がなくなったときに、岡野さん一人と何かやってみようということで、「DISPATCHERS」という番組を 2020 年からレギュラーで始めた。コロナの時期にはプライベートスタジオでの弾き語りをやったり、他のミュージシャンとのオンライントークをしたりとか、音楽活動に密着する番組だったが、今回は岡野さんが住んでいたスペインをファンの人、スタッフの人に紹介したいというご本人の意向のもと、音楽活動とは全く関係なく、スペインまでロケに行った。
- スペースシャワーTV はアーティストとの距離感をすごく昔から大事にはしているので、他のチャンネルの旅番組とは違う面を見せたいと考え、ナレーターなしでディレクターの手書きのテロップだけで進行し、岡野さんの素の表情を収めるために、信頼していただいているスタッフだけの最小人数でロケに行った。音声スタッフもいないので音が聞きづらい部分もあったり、綺麗なカットがとれていなかったりもしたが、そのぶん岡野さんの表情などは他の番組では見ることのできないものになったかと思っている。

■その他事項として、株式会社サテライト・サービスの番組供給者である株式会社フジテレビジョンが 2025 年 10 月 26 日に発生した放送事故についての報告が窪田からあった。

次回予定
・次回は令和 8 年 3 月開催を予定。
・議題はフジテレビ ONE スポーツ・バラエティと Mnet で放送される番組の予定

以上